

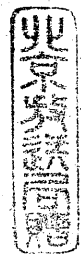
レーニン主義  
と  
現代修正主義

紅旗

1963年1号

外文出版社  
北京

修正主義者の鏡



外文出版社  
北京

## 修正主義者の鏡

(一九六三年三月九日付「人民日報」社説)

この一年のあいだ、ダンギーをかしらとする修正主義一味は、インドの大ブルジョア・大地主の支配グループによる大規模な反中国・反共・反人民のキャンペーンをおこした機会に乗じて、インド共産党の指導権をその手に入れた。彼らはマルクス・レーニン主義とプロレタリア国際主義を裏切り、インドのプロレタリアートとインド人民の革命事業を裏切つて、民族ショービニズムと階級投降主義の道をあゆみ、インド共産党内部に嚴重な混乱をひきおこした。彼らはインド共産党をインドの大ブルジョア・大地主の従属物に変え、ネール政府の下僕に変えようとしている。

ダンギーのやからはいつたいどれほど墮落しているのだろうか？ まず、ダンギーが一九六二年十一月十四日、ネールの誕生日を祝つて送つた手紙を見てみよう。

3 以下はこの手紙の全文である。

「親愛なるパンジットへ」

あなたが七十三歳の誕生日を迎えるにあたって、わたしはインド共産党を代表してあなたにわたしたちの心からなるお祝いを申し上げます。

インドが民族の自由をかちとるたたかひの中で、あなたはかつて全インドをはげまし、雄々しく指導されました。

インドが独立してからも、あなたは新しいインドが計画的な発展、民主主義、社会主義、平和、非同盟政策、反植民地主義政策がまちがいがなく実行されるための基礎をきずかれました。

今日、中国の侵略によって重大な危機がもたらされている時、全国はすでにひとりの人間のようにあなたの周囲に結集して、その榮譽と保全および主権を守っています。

インド共産党はあなたの国防政策と全国団結の政策を無条件に支持することを誓います。

あなたが理想とされる繁榮する社会主義インドの樹立を実現されるよう、あなたの長寿を祈ります。

あなたの忠実な

インド共産党議長 S・A・ダンギー

これは通り一ぺんのあいさつの手紙ではない。この手紙のなかで、(一)ダンギーはインドの反動派とすつかり同じ立場にたつて熱狂的に社会主義の中国に反対している、(二)ダンギー

は、インド共産党がネール政府の反中国・反共・反人民のいわゆる「国防政策と全国団結の政策」を支持することを誓い、しかもこのような支持が一般的な支持ではなく、「無条件な支持」である。(三)ダンギーは、インドにおける社会主義実現の希望を大ブルジョアジー・大地主の代表者であるネールに託している。

これは、ダンギー一味がインドのプロレタリアートにそむいた政治的誓いであり、自らをインドの大ブルジョアジー・大地主ならびにネール政府にささげる身売り状である。

ダンギー一味の修正主義的面目は、一九五九年ネール政府が中印辺境での衝突を引き起こしてからますますはつきりとバクロされている。ここ三年あまりいらい、彼らは終始大ブルジョアジー・大地主の立場にたち、ネール政府の反中国カンパニアの弁護人となり、用心棒となつている。

一、ダンギー一味は中印境界の歴史的背景と実際状況をぜんぜん顧みることなく、ネール政府が中国にもち出した領土的要求を無条件に支持している。中印境界の東部区間については、彼らは不法なクマホン・ラインが「実際上すでに画定された」「インドの境界」であるといひ、中印境界の西部区間と中部区間については、彼らはネール政府の理不尽な要求を「正しい」といつている。

二、ダンギー一味は、インドの支配グループが内政と外交の必要から故意に辺境の衝突を引き起こした事実をぜんぜん顧みようとせず、こともあろうに辺境での衝突の責任を中国になすりつけ、中国は「インドの政治情勢にたいして誤った見積りをたてている」、「そのためこんどの紛争を引き起こしたのだ」などといっている。

三、ダンギー一味は、三年余にわたってインドの軍隊がたえず中国を侵犯している真相をバクロシないばかりか、ネールの後にくつついて、インドの反動支配グループの意向にしたがって、中国に対し、たてつづけに悪らつきまわる中傷と攻撃をおこなっている。彼らは、中国が「信義を守らない」とか、中国が「武力にうったえてインドとの境界紛争を解決しようとしている」とか、中国は「彼らのあらゆる旧皇帝のふるい地図を堅持している」とか、中国は「歴史上、地理上彼らのものであつたとみとめる国家形態を熱狂的に回復しようとしている」とか、中国は「二インチの垣根のために」、「生命の安危もかえりみず、隣同士である兄弟となぐりあいをしていゝる」とか、中国は「ある種のナポレオン主義に支配」されており、「軍国主義的な、頑冥な態度」をとり、「はなはだしきにしたつては世界の平和をおびやかしている」等々といっている。

四、ダンギー一味は、あくまで中印境界の緊張をたもちつづけ、和解を拒絶するネール政府の

頑固な立場を非難しないばかりか、話しあいを拒絶するネール政府の態度のために極力弁護している。その上彼らは、ネール政府のもち出した、話しあいを再開するための先決条件を「完全に支持する」といつている。

五、ダンギー一味は、インドの軍隊が中国にむかつて大規模な攻撃をおこしたことを公然と援護している。一九六二年十月十二日、ネールが中国の領土を準備している中国の辺境守備隊を「とりのぞく」ことを命令してから八日目に、ダンギーは談話を発表して「中国の部隊はマクマホン・ライン以南に侵入することによって、インドの領土を侵犯した」、「われわれは、インド政府の報告はこの点真実であると考えている」などといっている。

六、ダンギー一味は、ネール政府が中国にたいして大規模な武力攻撃をはじめたのち、大きな声をはりあげて「祖国を守れ」とわめきちらしている。彼らは一九六二年十一月一日、十二月二日ならびに一九六三年二月十二日と、たてつづけに反中国の決議を公表し、全力をあげてネール政府の「国防政策と全国団結の政策」なるものを支持することを宣言し、また、人民大衆をあざむいて、彼らに「すすんでより大きな犠牲を払」わせ、ネール政府が「どのような国から兵器を買い入れ」ることをも支持させ、アメリカ帝国主義と結託するネール政府の政策を支持させようとしていゝる。

ダンギー一味が共産主義者の衣をまとつて、人民をあざむき、反動的な民族主義的気分をおおり、中国・インドの友宜を破壊する面で、ネール政府の果たし得ない役割を果たしていることは、ひじょうにはつきりしている。ネール政府の内相はさいきん得意になつて、「この国の共産党の指導者であるダンギー氏が自ら中国の立場を非難し、インド政府の観点を支持されたということは、中国にたいするもつとも妙を得た回答である」といつているが、これはなにも不思議なことではない。

ダンギー一味の民族ショールビニズムはインドのプロレタリアートの利益にそむくばかりでなく、インドの圧倒的多数の人民大衆の利益にそむくものであり、つまりインドの民族の利益にそむくものである。ダンギー一味の民族ショールビニズムは対内的にはインドの大ブルジョアジー・大地主の反動的な民族主義的需要に應じるものであり、対外的にはアメリカ帝国主義がインドにむかつて新植民地主義をおしすすめる需要に應じるものである。こうした民族ショールビニズムの政策は、ネール政府が自国の人民を攻撃するのを支持する政策であり、ネール政府が民族の独立に危害を及ぼし、帝国主義に身をよせるのを支持する政策である。これは国際プロレタリアートに対する裏切り行為であり、インド人民に対する裏切り行為である。

ダンギー一味は、ネール政府が大規模な武力攻撃を起したその日から、ネール政府の「国防政策と全国団結の政策」なるものを支持する一連の活動をいつそうさかんにくりひろげ、さらに徹底的に彼らの階級投降主義の路線をおしすすめている。

その顕著な事実の一つは、インドの軍隊が中国の辺境にむかつて全面的な攻撃をおこしてから五日目に、ネールが「すべての労働者はストライキをやつてはならない」とわめきたてたのにつづいて、ダンギーはまづいていましてとばかり全インド労働組合書記長の資格でネールにあてて手紙を書き、労働者、雇い主、政府の三方面の代表が参加する会議を召集して、「生産戦線と国防方面の種々の問題」を討議するよう提案した、ということである。案の定、ネール政府はダンギーのいうがままに、すぐさまこの三方面の代表からなる会議をひらいた。この会議で労働者のストライキ、サボターージュを禁じ、労働者に残業を要求し、「国防基金」を献納し、「国防公債」を買い入れるという決議を一致して採択した。

ダンギーのこうしたやり口は、インドの大ブルジョアジーが労働運動を破壊し、労働者の基本的な権利を剝奪し、勤労人民に対する搾取と奴隷化を強化するのを直接援助したものである。インド共産党の議長、全インド労働組合書記長たるダンギーがこのような恥ずべき行動をとつたということは、彼がすでに、支配階級が労働者階級と勤労人民にむかつて攻撃するための道具になりさがつたことを示すものである。

もう一つの顕著な事実は、一九六二年十一月に、ダンギー一味の一員であり、インド共産党中央執行委員であるサルデサイが宣伝ビラをふりまいたことである。この宣伝ビラには、つぎのようなことが書いてある。

「一つの社会主義国家がわが国を攻撃するにあたって、われわれが国を守るために背おっている道義的な責任は、わが国その他の同胞が背おっているそれよりも小さいのではなくて、いっそう大きいものである」

「われわれは執政の党——国民会議派——およびその他のあらゆる愛国的政党にたいし、真心から熱情をもって呼びかける。この緊急の際にあつて、われわれはかならずわれわれのあいだにあるすべての意見のくいちがいを捨て、共同の国旗のもとに団結すべきである。当面の唯一の試練と考慮は国防でなければならぬ」

「われわれははっきりと宣言する。たとえわれわれが国防のためにおこなわれる集団的努力の外にしめ出されても、われわれは依然としてこの事業のため全力をつくすであろう」

「われわれの同胞の中にはわれわれを賤しいものとみなそうとしているものがあるにもかかわらず、われわれはやはりこの職責を全うして、なんらの報酬も求めないであろう」

「当面もつとも必要とされていることと、われわれの愛国主義に対するきびしい試練は、だんごとし

てネール首相を支持することであり、彼の力を強化し、彼の命令を実行することである。彼は国家の最高統帥であり、総司令である」

みたまえ、ネールに対するダンギー一味の尽忠ぶりはなんと徹底していることか！ 国民会議派に対する彼らのへつらいはなんと鼻もちなぬものであろう！ 彼らの民族ショービニズムの気分はまた、なんとという熱狂ぶりであらう！ 彼らは懸命になつてインドの大ブルジョアジ・大地主の利益のために働き、インドの広はんな人民を駆りたてて社会主義の中国に反対させている。これはプロレタリア国際主義、インド人民の真の愛国主義といつたいなんの共通点があるだろうか？

さらに、もう一つ顕著な事実は、ダンギーが一九六二年十一月に全インド労働組合理事会の会議の席上で報告をおこなつたことである。この報告の中でダンギーはつぎのように言っている。

「われわれは国家を守るためには条件をつけない、なぜならば国家は人民のものだからである。わたしは、われわれのような状況のもとにあつて、まず国家はわれわれのものか、それとも自国のブルジョアジーのものかをききただしてからわれわれの行動をきめるべきだ、とは考えない」

「われわれは無条件に戦争のための努力を支持する」、「わたしは国防問題について無条件にネール政府を支持する」

「われわれは、われわれの民族主義を堅持しなければならない」

「全国が緊急状態にある状況のもとで、防備と戦争に直面しているこの情勢は、全インド労働組合に所属しているそれぞれの労働組合がブルジョアジーとの間の正常な関係を暫時あらため、労働者階級のさまざまな問題に関する任務と方針をあらためることを必要としている」

「労働者階級としてわれわれは、われわれがストライキ闘争と、この手段を用いてわれわれの階級的利益を守る問題を一時おあずけにすることを言明する」

「労資休戦はある意味においては『階級協力』だが、しかしこれは自発的に受け入れられたものである」

「無条件に自国のブルジョアジーを支持することは、この歴史的関頭にあつては、労働者階級の運動の原則にそむかぬものである」

「われわれは戦争のための努力を支持する。われわれは自国のブルジョアジーと同じ側に立つており、……ためらつてはならない。ためらえばためらうほど混乱を大きくするだけである」

ダンギーはここで国家の階級の本質を完全に否定して、大ブルジョアジー・大地主の独裁する

国家を公然と人民の国家であるといつてゐる。彼は完全にブルジョアジーの側に転落し、無条件にブルジョアジーを支持するとおおつびらに主張している。彼は完全にマルクス・レーニン主義の階級闘争の学説にそむき、おおつびらに階級協力をとなえている。ダンギーのやからは完全にインド大ブルジョアジーの手先に墮落してしまつてゐる。

とりわけ人を驚かせるのは、ダンギーのやからが、片方では「全国の団結」というスローガンのもとにネール政府と大いに団結を語つてゐるが、もう一方ではインドの支配グループの力を借りてインド共産党の内部で異端を排斥し、大いに分裂行動をおこなつてゐることである。中国の 辺境守備隊が主動的に停戦し、主動的に撤退したのち、ネール政府は事前に手に入れていたリストによつて、全国にわたつて大検挙をおこない、プロレタリアートと人民の事業に忠実なインド共産黨員八〇〇〇〇名とインド共産党の各級組織の中堅幹部を拘禁した。ダンギー一味は一方では、「全党員がこの検挙に激怒せず、冷静に、おちついて、だんことして党の政策を実行するよう呼びかけ」、他方では自分の腹心を派遣して、警察行動のすぐあとにつづいて、インド共産党のいくつかの州委員会の指導機関をのつとつた。ダンギー一味のこのような行動は、大ブルジョアジーの需要に応じてインド共産党を改造し、インドの革命運動を葬りさうとするものにほかならない。



ダンギーのやからはさらに、ネール政府を助け、「社会主義」の看板をかかげて人民をたぶらかしている。彼らは、ネールを持ち上げてインド「全国の団結の象徴である」といい、「このよ  
うな人が国家の首脳となり、また、われわれ（ダンギーが自分たちをさしていつている）が共同  
戦線の中で正しい態度をとるならば、この戦線は未来の発展の指導的力となるであろう。どのよ  
うな未来の発展かといえば、それは社会主義を実現することである」などいつている。

モスクワ声明の中には、共産主義者はブルジョアジーの政治屋が社会主義というスローガンを  
利用して人民をたぶらかすことをバクロしなければならぬ、とはつきり書いてある。ところが、  
ダンギーのやからは、ネールの社会主義をバクロしないばかりか、インドの共産主義者とイ  
ンド人民に、ネールはたしかに社会主義の政策をとっており、無条件に彼を支持すべきであると  
いつている。彼らは国民会議派に、インド共産党と協力することを公然と要求し、ネール政府の  
指導のもとにインドで社会主義を建設することを要求している。それならたずねるが、ダンギー  
一味がネールと彼の国民会議派にたよって社会主義を実現できると考えているからには、ダンギ  
ーのやからが牛耳っている共産党はもはや存在する必要がなくなつたではないか？

以上の幾多の事実の中から、ダンギー一味が修正主義の道にそつてますます遠くへすべり出し  
ていることがわかる。彼らは階級協力のスローガンをもつて階級闘争の学説に、ブルジョアジ  
ーの社会主義をもつてプロレタリアートの社会主義にすりかえている。彼らは全心全意大ブルジョ  
アジー・大地主の独裁を擁護して、インドのプロレタリアートとインド人民の革命事業を九重の  
雲の外へほうり出してしまつている。彼らは、アメリカ帝国主義に身売りするネール政府の政策  
を無条件に支持し、帝国主義に反対してたかう任務をすつかりなげ捨ててしまつている。彼ら  
は中印両国人民の友宜をふみにじり、ネールの反中国カンパニアの中でラツパ手をつとめてい  
る。彼らはブルジョアジーのショービニズムをもつてプロレタリアートの国際主義にすりかえて  
いる。要するに、ダンギー一味はこれほど墮落しているのである。すなわち、彼らはマルクス・  
レーニン主義を裏切り、プロレタリア国際主義を裏切り、階級投降主義と民族ショービニズムの  
泥沼にますます深くはまりこんでいるのである。

共産党の内部にダンギーのやからのような修正主義者が生まれたことは、歴史上はじめてのこ  
とではない。

第二次世界大戦いらい、修正主義の思潮はかつて一部の国の共産党をおそい、多くの党の内部  
にマルクス・レーニン主義の叛徒があらわれた。たとえばアメリカのブラウダー、ゲイツ、テン  
マークのラルゼン、日本の春日庄次郎などがそれである。資本主義国の共産党内ばかりでなく、  
プロレタリアートが一度政権を握つたユーゴスラビアにもマルクス・レーニン主義を裏切るチト

一の修正主義一味が現われた。全世界の共産主義者にとって大切なことは、これらの叛徒の一味が共産主義の事業にもたらした損害の中から教訓をくみとることである。

チトー一味は一つの鏡である。この鏡は一つの叛徒のグループがどのようにして修正主義の路線を通じて、一つの党を腐蝕し、一つの社会主義国家を資本主義国家に変質させたかを映し出している。

タンギー一味もまた一つの鏡である。この鏡は、資本主義国家の共産党の指導者が、どのようにして修正主義の道に踏み入り、この道にそってすべりおち、ブルジョアジーの下僕とシッポになりさがったかを映し出している。

いま、インドの共産主義者とインド人民はひじょうに困難な境遇におかれている。中国共産党と中国人民は、共産主義事業のためあくまで奮闘するインドの共産主義者にたいし、光栄ある革命の伝統をもつインドのプロレタリアートとインド人民にたいし、心からの関心と同情をよせるものである。いかなる反動派、いかなる修正主義者といえども、インド人民の前進の道をはばむことはできない。マルクス・レーニン主義の力はやがてプロレタリアートと広はん人民大衆に依拠することによつて、複雑な、曲りくねった闘争のなかで、すべての困難を克服して成長し、大きく発展してゆくであろう。歴史はやがて、あくまで真理をまもり、正義をまもり、マルク

ス・レーニン主義をまもり、プロレタリア国際主義をまもる者が、インド人民の利益と民族の利益の真の代表者であることを証明するであろう。インドの未来は彼らのものである。

現在、中国とインドの關係は、これまた困難な時期につきあたつてゐる。インドの反動派と修正主義者は、なんとかして中印両国人民の友宜をぶちこわそうとしてゐるし、帝国主義もこの機に乗じて火事ドロをやり、離間挑発をおこなおうとしてゐる。しかし、われわれは中印両国人民の長い、歴史的伝統をもつ偉大な友宜の力を低くみつもる理由はない。インドの反動派にせよ、タンギー修正主義一味にせよ、この力の前にあつてはケン粒ほどの存在でしかない。中印両国人民の友宜、中国の共産主義者とインドの共産主義者の友宜は究極においてなにびとも破壊することのできないものである。

63.4.4



1. インド共産党中央委員会報告 1964.10.31 ~  
(ナセ回大会) 11.7

Calcutta

『ナンデーの思想上の修正主義、  
階級協調主義路線および  
分裂主義的組織方法』

2. インド共産党ナセ回大会決議  
1964.12.13 ~ 23 Bombay

『ナンデー論争と国際共産主義  
運動の統一』

以上は 世界政治資料 No.210

1965.3月上旬に抄収

